

目次

57 巻頭言

伊谷 原一

58 連載「ぼくはこうしてゴリラになった」第20回

地図のない森・・・山極 壽一

60 連載「今日もOSARU日和」第10回

創立記念日に想う・・・竹下 景子

62 連載「生態学者が往く」第16回

富山・立山の旅・・・湯本 貴和

64 連載「野生動物を遺伝子から見る」第11回

グラスカッター飼育で野生動物保全・・・村山 美穂

66 連載「野生動物のおなかの中の秘密 パート2」第5回

ライチョウの腸内細菌のふしぎ・・・土田 さやか

68 連載「大型類人猿探訪」第23回

コミュニケーションを進化の視点から考える・・・林 美里

70 連載「ウマ学ことはじめ」第23回

ポルトガルのミランダ・ロバ・・・レナータ・メンドンサ

72 連載「自然と芸術」第20回

擬人化される動物たち・・・牛田 あや美

74 連載「動物園・水族館だより」第14回

カメラトラップがとらえたマレーバクのくらし・・・田和 優子

76 連載「環境教育実践」第22回

持続可能な里山での循環する暮らしと生業・・・安田 佳弘

78 虫好きのリスザルは虫を旨く感じている～動物園で探る霊長類の味覚・嗅覚～

早川 卓志

80 変化を続けるフィールド 新潟県・笹ヶ峰高原

杉山 茂

82 世界の霊長類 第3回

オオガラゴ・・・赤見 理恵

83 収蔵資料めぐり 第3回

Pr. 878 アビシニアコロブス・・・高野 智

84 イベントのご案内・ご寄附のお願い

■表紙 P80「変化を続けるフィールド 新潟県・笹ヶ峰高原」より

9月初旬、池ノ峰仙人池付近でブナの実をくわえるニホンザルの子ども 撮影：杉山 茂(静岡大学)

巻頭言

伊谷 原一（公益財団法人日本モンキーセンター）

日本モンキーセンターは 2021 年 10 月 17 日に満 65 歳の誕生日を迎えた。モンキーセンターが設立された当時の日本人の平均寿命がほぼ 65 歳なので、モンキーセンターはそれを上回ろうとしている。詳細はほかに譲るが、ここまでの道のりは決して平坦なものではなかった。2014 年に公益財団法人化して新たな船出を遂げたが、その後も疾風怒濤のなかで苦難の航海を続けている。

ここまで来るためには設立当初から多くの方々のご苦勞があったことは言うまでもない。そうした方々のほとんどはすでに帰泉されている。設立 30 周年の式典で記念講演をされ、その翌年、第 5 代所長に就任した河合雅雄氏のご逝去は記憶に新しい。

設立 30 周年の 1986 年 6 月にモンキーセンターに配属されたのが動物園長補佐兼動物病院長を務めた木村直人氏である。また、1990 年 6 月にモンキーセンターに入社し、2014 年から動物園部統括を務めたのが堀込亮意氏だった。そして、木村が本年 10 月 18 日に、堀込が同 11 月 12 日にそれぞれ定年を迎えたことは感慨深い。律儀で繊細な木村の仕事ぶりはモンキーセンターを大いに支えてくれた。ときには細かすぎると揶揄されることもあったが、多岐にわたって細部にまで気配りできる人材はそういない。一方、堀込の大らかな人柄は動物園部をまとめ上げるのに欠かせないものだった。独特の福島弁口調はときにスタッフを和ませ、ときに部下を叱咤激励した。両極端な二人がいたからこそバランス

が保たれていたのかもしれない。今後二人の役割を担う人材が現れるだろうか。いや、まったく異なるキャラクターによる新体制を模索すべきなのかもしれない。

お二方とも、河合所長からの 30 年以上にわたってモンキーセンターに多大な尽力を傾注された。それぞれのご貢献に対して御礼申し上げるとともに、お二方をサポートするために苦勞されたご家族にも感謝の意を表したい。今後のお二人のご活躍とご多幸を心より祈念する。

さて、木村・堀込の両氏が抜けたことでモンキーセンターのスタッフの平均年齢は少し若返った。唯一それを引き上げているのが私である。私もそろそろ引き際だろう。再来年の 3 月には本務である京都大学の定年を迎える。急速かつめまぐるしく変化する現代社会において、新しい波をさばききれない舵取りは航海の邪魔でしかない。ダグラス・マッカーサーの演説にならい「老兵は死なず、単にただ消えゆくのみ」と考えている。



伊谷 原一
いだに げんいち

京都大学野生動物研究センター・教授・センター長。
公益財団法人日本モンキーセンター・所長。霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院のコーディネーター。京都市動物園学術顧問。京都大学熊本サクチュアリの所長。野生ボノボや野生チンパンジーの生態を通じて、人間社会の起源についての研究を進めている。